好きにしろ（仮）シリーズ：神剣の舞手外伝

やー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きにしろ（仮）シリーズ：神剣の舞手外伝

【Ｎコード】

Ｎ２９０９Ｗ

【作者名】

やー

【あらすじ】

神剣の舞手に関する資料及び外伝系のものを此処に放置。基本更新速度は遅い。本編に期待しよう。

ステータス表的なもの。

ちょっと現時点でのティン一行のステをと。

ランクの解説。

ランクはF～Sで分けています。それぞれ内訳が。

F：始めたばっかか、才能が絶望的。ずっとこうなら一切のびないよ！

E：脱・一般人！　一端の駆け出しさ！

D：だんだん慣れて来た証拠。初心者の熟練、熟練初心者！

C：初心者を超越し、真の熟練者に！　でも極みにはまだ遠い……。

B：よくぞ来た。此処まで来れば立派な達人だ！　だが、上には上が居る。

A：ついに来た、人間の限界！　努力で来れるのは此処までだ。これ以降は才能かもっと努力が要るんだぜ。

S：人の限界さえを超越した世界へようこそ。

と言う感じです。比喩とか目安ですのであまり説明文を鵜呑みにしない。

後、測定不能のEXと言うランクがあります。

Sより強い。と言う訳では無く純粋に測れないと言う意味です。

ちなみに（）内は技能や魔法による補正ランク。

続いてステの意味。

耐久力：よくゲームで言う所のHP。

スタミナ：MPと思えばよし。

魔法力：所有してる魔法力の器の大きさ。大きいほどスタミナの魔力変換率が高くなる。

物攻：腕力、脚力等の物理的な攻撃力。

魔力：魔法力から生み出せる魔力の濃密度のランク。

技量：各種動作、技、技術の錬度。高いほど動きが確実、正確に。
俊敏：全体的な動きの速さ。高いほど全体的な動きが早いのです。
器用：全般的な行動の器用さ。高いほど奇跡的な動きと摩訶不思議な現象を引き起こす。
幸運：全体的な運の良さ。これは過去の経緯から弾きだしてるので高いからと言ってこれからも良いことばかりじゃない。
守備：物理攻撃への防御技能。高いほど物理攻撃のダメージを消せる。
魔力抵抗：魔法に対する抵抗力。高いほど魔法の影響を受けにくい。
以上。一応武器の込みは無しで。次はスキル系統。
基礎技能：個人の有する基礎的な技能。
特殊技能：特殊な技能。好き好んで修得したものだ。
個人技術：個人で磨いた人の性格をもろに示したり、持って生まれた個人だけの技術。
次に装備品。これは各キャラの現時点での装備品です。
総合威力は攻撃に用いた場合の威力のランク。
使い易さは武器の握りやすさ、持ち易さ、動かし易さから大凡のランク。
耐久力は他の武器と打ち合わせたり、防御に使った場合の壊れる目安。高いランクほど壊れにくい。
物理耐久は防具の物理衝撃に対する耐久度の割合。高いランクほど壊れ難い。
物理吸収は受けた物理衝撃を奪って外に逃がす度合い。高いランクほど受けた物理攻撃の衝撃を軽減する。
その次に総合戦闘力。装備品・各種技術とステータスを総合したものです。
これらで解説。ではどぞ。

ティン

耐久力：Ａ
スタミナ：ＳＳ
魔法力：ＥＸ（－Ａ）
物攻：Ｃ
魔力：Ｆ
技量：ＳＳ
俊敏：Ａ
器用：ＳＳＳ
幸運：Ｃ
守備：Ｄ
魔力抵抗：Ｆ

基礎技能
剣術技能：ＳＳＳ
光魔法技能：Ｄ
特殊技能
投剣技術：Ｃ
　投剣技術とは？　普通の剣、長剣、大剣などを投げる技術です。
　Ｃランクは技の動きに剣を投げる動きを仕込めます。
個人技術
ダンシングステップ：ＳＳ
　移動力・回避率・俊敏が増加。
魔力不感応
　魔力感度が低いため、魔力の制御率が下がります。（魔法力補正－Ａランク）
急所看破
　モノの斬り易い部分を瞬時に看破して攻撃します。（致命率＋Ａ、致命攻撃発生時“一撃撃破”発生確立付与）

装備品
武器：無し
サブ武器：銀の騎士剣
（総合威力Ａ：使い易さＤ：耐久力Ｂ）
頭装備：「あたし、頭に何か付けるの嫌」
顔装備：「あたし、けしょーとかきょーみない」
首装備：オーラマント
（光属性中級以下の魔法を無効。各属性魔法抵抗力ＵＰ。使うと……？）
上下装備：輝きの騎士服
（物理防御・物理吸収率Ｂランク。光属性耐性ＵＰ）
手装備：オーラグローブ
（光の魔法レベル１ランクＵＰ）
足装備：ライトブーツ
（光属性耐性ＵＰ）

総合戦闘力。
物理攻撃：Ａ・物理防御：Ｃ。
魔法攻撃：ＥＸ・魔法防御：Ｄ。
回避：Ｓ・俊敏：ＳＳ・命中：ＳＳ・致命率：ＳＳＳ。

一応、神剣の舞手の主人公。
見事なまでに普通の手数と速さに特化した剣士だぜ。
やたらと剣術のレベルが高いが、１５年も修行してるのでもう達人級。
鉄棒がちょっと質の悪い剣に早変わりするレベル。
後、魔法攻撃はあまりに駄目過ぎて測定が出来ないって意味でＥＸ。測れないほど、魔法が駄目なんだ……。

で、これが一応ティンの絵。描いたのは作者。ド下手だがまあ気にすんな。

＞i27819—3609＜

結城浅美

耐久力：C

スタミナ：A

魔法力：SS－

物攻：D

魔力：S－

技量：A

俊敏：A（＋S）

器用：SSS

幸運：B

守備：D－

魔力抵抗：B

基礎技能

剣術技能：A

風属性技能：S（俊敏補正＋S）

風探知力：S

　風に触覚を宿し、周囲の状況を探る。（回避補正＋S）

水属性技能：C

氷属性技能：E

銃術技能：C

特殊技能

調理技能：S

掃除技能：A

総合生活技能：A

掃除、調理以外の生活力を示すもの。高いほど主婦（主夫）たる能力が高い。
狩猟技術：Ａ
水泳技術：Ｂ（＋Ａ）
聴覚強化技能（風）：Ｓ（回避補正＋Ｓ）
臭覚強化技能（風）：Ｓ
　風を使って音や匂いを拾う技能。高いほど高位魔導師の証。
総合サバイバル技能：Ａ
　総合的なサバイバルの技能。高いほど、サバイバルの精通してる証。
飛行技術：Ｓ
　風の魔法による飛行技術。高いほど空を自由に飛べる。
二丁拳銃技能：Ｂ
双剣技能：Ａ
個人技術
風跳弾：Ｓ
　局地的に強烈な風圧の壁を生み出し、跳弾させる。
弾道調整：Ｓ
　風を操り、銃弾を制御する。
混沌制御：Ｂ
　混沌の制御する力。高いほど混沌を操れる。

装備品
武器：神剣アル・ヴェクション
（総合威力：Ｃ、使い易さ：Ａ、耐久力：ＥＸ）
サブ武器：カオス・スパイラル
（総合威力：Ｓ、使い易さ：Ｃ、耐久力：ＥＸ）
頭装備：「髪の邪魔になるから付けない」
顔装備：「顔装備？　顔になに付けるの？」
首装備：無し

左腕装備：エレメンタルリング
（使用魔法の属性を変える）
上着装備：フェザージャケット
（物理耐久：Ｄ、物理吸収：Ｅ、風耐久ＵＰ）
上着（下）：フェザーシャツ
（物理耐久：Ｃ、物理吸収：Ｃ、風耐久ＵＰ）
上下装備（下）：フェザーバトルスーツ
（物理耐久：Ｄ、物理吸収：Ａ、風耐久ＵＰ）
下着装備：フェザースカート
（物理耐久：Ｅ、物理吸収：Ｅ、風耐久大幅ＵＰ）
足装備：フェザーソックス
（物理耐久：Ｂ、物理吸収：Ｅ、風耐久ＵＰ）
靴装備：フェザーバトルシューズ
（物理耐久：Ｃ、物理吸収：Ｅ、風耐久ＵＰ）
フェザーシリーズセット効果
　跳躍力・飛行魔法の制御力ＵＰ・風耐久ＵＰ
ポケットの中
進化の羽
（魔法に使うと何かが起きる？）
９ｍｍ自動拳銃×２
（総合威力：Ｃ、使い易さ：Ｂ、耐久力：Ｃ、最大装填数：１５）

総合戦闘力。
物理攻撃：Ｂ（サブ：Ｓ）、物理防御：Ｃ＋。
魔法攻撃：Ｓ、魔法防御：Ａ。（風耐性ＳＳ）
回避：ＳＳＳ、俊敏：ＳＳＳ、命中：Ｓ、致命率：Ａ。

はい。浅美です。回避に滅茶苦茶特化しています。
その分凄く、物理面が脆いのです。神剣でも物理攻撃面が低いの

です。
脅威の速度から生み出される連撃も凄いのだが。
ちなみに銃は使いますが、魔法を使わないとノーコンです。
ちなみに戦闘方面以外に特化し過ぎなのは仕様。子供の頃からそう言う事ばかりしてたのです。

氷結瑞穂
耐久力：ＳＳ＋
スタミナ：ＳＳＳ
魔法力：Ｓ＋
物理攻撃：Ｅ（＋Ｓ）
魔力：ＳＳ
技量：Ｓ
俊敏：Ａ
器用：ＳＳ
幸運：Ｃ
守備Ｆ
魔力抵抗：Ｆ－

基礎技能
根術技能：Ａ
棒術技能：Ａ
体術技能：Ｓ
氷属性技能：ＳＳ
大剣技能：Ｃ
大斧技能：Ｂ
大鎚技能：Ａ
槍術技能：Ｄ
特殊技能

投剣技能：Ａ
　普通の剣を投げる技能。Ａランクは大剣さえ華麗に投げ付ける。
投槍技能：Ｂ
　普通の槍を投げ付ける技能。Ｂランクは普通の槍を遠くからダーツの様に投げ付ける技能。
錬気・剛：Ｓ
　体内の生命エネルギーで腕力や脚力を強化。（物理攻撃補正＋Ｓランク）
錬気・呼吸法：ＳＳ
　体内の生命エネルギーで体の疲れを取ります。（スタミナ回復Ａランク）
錬気・癒：Ａ
　体内の生命エネルギーで体中の栄養素を活性化させ、傷と体力を癒します（体力回復Ｃランク・状態異常回復）
直感見切り
　自分への攻撃に対し、直感で見切る事で回避力を上げます（回避補正＋Ｅランク）
マッピング技能：Ｃ
　道具が一通りそろって居るなら、休憩時に地図を作れます。
熱源察知：Ｅ
　周囲の熱い所を探って生命体の探索を行います。
個人技能
超絶記憶力
　一度見た聞いた感じた事を忘れません。
同調
　自分の中に居るモノと同調します（耐久力、スタミナ、魔法力を除いたステから高い順位３位までのステが倍化）
攻撃予測
　過去の経験を元に、相手の攻撃を見切ります（回避補正Ｄランク）
不屈の魂

どんな強烈な攻撃にもぎりぎりまで耐えます（一度だけ、どんな一撃にも耐久力１％で耐える）
折れぬ心
　どんなに激しい連撃にも限界まで耐えます（一度だけ、ワンコンボを受けても耐久力１％で耐える）

装備品
武器：氷結のメイス
（総合威力：Ａ、使い易さ：ＥＸ、耐久力：ＳＳ・耐久性は瑞穂の魔力とリンク、氷魔法威力補正Ａランク）
サブ武器：無し
頭装備：「髪に何か付けるの嫌い」
顔装備：マジックリップ
（各種魔法耐性ＥランクＵＰ）
首装備：ホワイトケープ
（氷耐久ＵＰ）
腕装備：フェアリープリンセスグローブ
（各種魔法耐久ＡランクＵＰ、魔力補正Ｂランク、物理防御：Ｓ、物理吸収：ＳＳ＋、再生能力）
上下装備一覧（多いのでまとめ）
メイジジャケット（白）
ホワイトブラウス
ブラックスーツ
氷雪の外装
マジカルオーバーニー（黒）
（総計物理耐久：Ｂ、物理吸収：Ｅ、氷耐久ランクＢ、各種魔法耐久Ｅランク）
ファイトシューズ
（物理耐久：Ａ、物理吸収：Ｂ、総合威力Ｃ）

総合戦闘力。
物理攻撃：ＳＳ＋（武器込み：ＳＳＳ）、物理防御：Ｆ。
魔法攻撃：ＳＳＳ、魔法防御Ｆ。
回避：Ｓ＋、俊敏：Ａ＋、命中：Ｓ＋、致命率：ＳＳ。

瑞穂です。超攻撃過多です。悲しいほどに防御が駄目駄目です。
耐える事は耐えるのですがフルボッコであっという間にやられがち。
ただ攻める事に関しては異常な性能になっています。何でこんなピーキーな実力に。
以下、瑞穂のイメージイラスト。描いたのは作者だ。これでもマシになった方、と言っておこう。
＞ｉ２８３６７―３６０９＜

以下、随時更新。

ステータス表的なもの。（後書き）

一応各キャラの技能とかステとかをゲーム的に記載。
後、ランクがおかしくても気にしちゃ駄目だぜ。
目安にしとくと幸せになれるよ。

幕間

淡い光が黒い髪を照らす。
少女は片膝を抱いて視線を地に落とし続けていた。
風がそっと彼女を撫でる様に通り過ぎ、美しい黒髪を靡かせる。
縁側の淵で佇む少女は何処か儚げで、それ故に美しかった。
そんな少女に視線を向けるものがいる。背後にある襖の、その奥。
心配そうな表情で黒髪の少女を見つめる少女達が居た。
「華梨ねえちゃん……」
少女達が、月に照らされて項垂れてる華梨を見つめている。
彼女が項垂れているのは、勿論幼馴染の家出が原因だ。
――もうお前なんか顔も見たくない！
華梨の頭に、ずっと同じ言葉が響く。
（あいつのこと、分かってたつもりだった。
いつもお気楽で、めんどくさがりで、お調子者で……でも、たまには妹達の面倒を見てて……）
沈黙を保ったまま、時間だけが過ぎ去っていく。

「しっかし、今回の事は正直驚いたぞ」
師範代はばーさまとじーさまと一緒に月見酒を楽しんでいる。
「まさか、ティンがあんな宿命背負ってたなんてよ」
「人には誰であれ、大きくも小さくも宿命を背負っているものですよ」
ばーさまは優しく説く。
師範代は「んなもんですか」と猪口を口につけてグッと上げる。
「いやはやしかししかし、わしゃ嬉しいぞい」
「師匠、何が嬉しいのですか？」
猪口に新しい酒を注ぐとじーさまもほれほれと猪口を差し出し、

師範代はそちらにも酒を注ぐ。
「ずっとわしはあの子、ティンを見ていた。
じゃが、あの子には人間として重要な物が欠けておった。
何か分かるかね？」
じーさまに問われた師範代はふむと顎に手を当て、無精髭を撫でる。
１８年強。
この師範代が見て来たティンだ。
彼から見たティンの印象、それは。
（……元気な奴だ。眩しいくらいに、喧しくて自由奔放な俺よりも遥かに人間らしいやつ。
何処にも人間として欠けてる部分なんて）
「ない。などとたわけたことは言うなよ」
師範代が考え事をしていると先回りをする様に言った。
「だから主には人を見る目が欠けてると言うのじゃ。
それではハーレム王になるどころかわしに様な一流のナンパ師にはなれんぞ」

閑話休題。

「よいか、スガードよ」
師範代――スガードはボロボロになったじーさまを見てふむと姿勢を正す。
「ティンは家を出たあの日までに、わしはあの子が怒った所を見た事が無い」
「……は？」
スガードは素っ頓狂な声を出す。
「ま、待ってくださいよお師匠。

あいつは確かに何時も昼寝か剣術修行ばかりで、何時も我儘言ったり文句言ったりして」
「じゃが、本気で怒った所はあるかね？」
「そ、それは」
「思い出してみるが良い。
あの子は今まではっきり分かるほどに憎悪と怒りと悲しみを出した事があるかね？」
思い返す。今までのティンを。
家事の手伝いをしないティンを叱ると不満げな表情はするが、少なくとも言われた通りにはしてた。
模擬戦で負けた時は悔しさを表に出すことも特になく、寧ろ「負けたが楽しかった」と言う感じだ。
食欲は強い。
だが、妹分達に自分のおかずを、しかも好きな物を自主的に譲る事もする。
思い出す。
ティンには負の感情を露わにすることがあったかを。
だが、記憶が語る。
見せたり、浮かべたりはしても――ティンは、負の感情を表に出すことが、無い。
「その様子からすると、思い出した様じゃな？」
スガードに向け、お師匠がニヤリと語る。
「以前、わしはあの子に問うてみた。
何故怒らないのか、何故悲しまないか。あの子はなんと返したと思う？」
「……怒る事の程ではない、と？」
「ふぉっふぉ、近い。が、違う。あの子の答えはな、面倒じゃと」
「面倒？」
スガードの表情が、険しく動く。
彼にとって、その答えは少し意外な様だ。

「その通り。あの子は己の感情を強く出すのを酷く嫌がっておった。
面倒であると、疲れると。
その時思ったのじゃよ。この子は何時の日か、外に出さねばならぬと」
「それは何故？」
「簡単じゃ。剣士にとって、向上心。そう、野心や闘争心と言う心は大事だからじゃよ。
どちらも、戦に生きる剣士には必須の心持。
そう、人の心を突き動かすのは常にマイナス方面の感情と、わしは思っておる。
切欠であれ、何であれな」
じーさまは月を見上げながら語り、酒を飲む。
「ですが、お師匠。負の感情で人は動くとは言いますが、全部が全部そうではないと」
「ほう、言うてみ」
「例えば、困ってる奴が居れば純粋に助けようと動く奴だって」
「おぬし、負の感情を悪い事だと思っておらんか？」
スガードの言葉を遮る様にじーさまは語る。
「困っておる者を助ける為に動く。打算も無く、ただ純粋に。
じゃが、それは「困っている人を助けたい」と言う欲望ではないかね？」
「それは負の感情とは別では」
「いいや、欲望は立派な負じゃよ。言うておろうに、負は悪ではないと。
結果や行く先が善と悪を分けるのじゃよ」
スガードはふむと顎髭をなでた。
「……なるほど。では、あいつは極端に正の感情が強いと？」
「いやそうではない。あの子は感情を激しく動かすことを嫌っておる。
面倒だと、面白くないと。確かにそうじゃ」

じーさまは月を見上げる。
「負に属する物は確かに動かすのは億劫じゃ。じゃがな、人が上に行けるのはそう言う感情あってこそ、とわしは思うのじゃよ」
そして、猪口に注がれた酒を口に流しこんだ。
「……あいつ、元気でやってますかね」
スガードは月見酒を楽しみながら、弟子の無事を祈った。
同じ夜空を見ていることを信じて。

街から離れた森の中、そこに寄宿舎付きの居酒屋がある。
月が照らす夜、居酒屋の入り口にでっかく「閉店」と書かれた看板が釣るされていた。
その中、深緑色の肩まで伸ばした従業員がテーブルを拭いて回っている。
「フェルラ、もう上がって良いぞ」
奥からそんな声が聞こえる。奥、厨房だ。
厨房には黒い髪を腰まで伸ばした女性が皿洗いをしていた。
「うーっす。んじゃ店長、お先失礼しまーす」
「おう」
深緑色の髪の女――フェルラはだい布巾を厨房に置くと厨房の奥にある部屋へと入っていく。
店長の方も皿洗いを一通り終えると店の消灯をし、厨房の奥にある部屋に入る。
部屋は六畳と言ったところ。卓袱台とＴＶと冷蔵庫等が置いてある。
その先の玄関を出ると次は寄宿舎がお出迎えだ。
店長はその中の一階の一番手前の、大家と言う名札のかかった部屋へと入っていく。

店長はバスタオルを身体に巻き、湿った髪を別のバスタオルで拭きながら居間に出てくる。
彼女はまず冷蔵庫に向かい、ビール缶を取り出し、次にドライヤーを手にすると髪に熱風を当てる。
そして手にしたビール缶を部屋の一角にあるパソコンの隣に置き、パソコンを起動。
ドライヤーを切り、ビールの蓋を開け、口につけ、ぐびっぐびっぐびっと喉を鳴らしてコメント！
「っかーっ！　うめっ！　焼酎も良いが、仕事後の風呂上りにビールもうめえ！」
親父臭いとか言うな。彼女にとっては至福の一時なのだ。
店長はビールを飲みながら「つまみあったか？」と呟きながら動いたパソコンの操作を始める。
ふと、ちらりと窓を見る。と、窓が勝手に開いた。
未だに彼女はバスタオル一枚である。風呂上りな為か体中に汗がまとわり付いている。
気にせず喉を鳴らしてビールを飲み干し、彼女はパソコンを動かす。
「さて、聞かせてもらおうか。――なんで妖精界の魔力が人間界に流れ込んでるのか」

月が照らす夜。
まだ人が消えてない時間帯にあちこちに屋台がある。
どうやらこの辺りは仕事帰りのサラリーマン辺りを狙って食い物屋台が並んでいるようだ。
こういうのは家庭のあるサラリーマンには酷い誘惑かもだが、とある人々には涙が出るほどありがたい。
そう、冒険者たちだ。
彼らは基本、重くも軽くも鎧を身に着け、武器も持っている。と

てもいかつい。
しかも気性が荒い奴や売られた喧嘩を問答無用で買う奴も居る為、大概の店では冒険者と見るや入店を断る店も多いのだ。
そんな都会の中に並び、冒険者も受け入れる夜の屋台。そんな屋台は初心者冒険者には憧れの場所で、多くの冒険者達の憩いの場所である
そんな中、ラーメン屋に一人だけで啜っている少女が居た。
新緑色の長い髪を首元辺りで三つ編みにして腰まで伸ばし、緑を基調とした服を身に着け、腰には太刀を、背中に長刀を背負っている。
彼女は黙々とラーメンを啜る。啜り続ける。
ふと、少女は薄く眼を開く。
――マスター、ちょっと耳に入れたい情報が。
（……何だ）
彼女は黙々とラーメンを食べ続け、スープも堪能する。
――妙な空気を感じます。これは……妖精界の魔力ですね。
（ふぅん。あの世界のねぇ……ま、あたしにゃかんけー無いか）
――ですよねー。
少女はなおもラーメンを食し続ける。時には蓮華でスープを啜る。
やがて少女は空を見上げる。夜を照らす月。
「……ま、平和が一番だ」

幕間（後書き）

ん、まあこんな感じで。
色んな人には色々ある訳です。

猫と狼の対決（前書き）

今回は第十話「初めてのアルバイト」で語られた瑞穂の激闘を描いたものです。
終始バトルなので嫌な人はスルーよろしく。

猫と狼の対決

某日、昼頃。氷結瑞穂は多くの冒険者が集う場所で喧嘩やもどきのことをやっていた。まあただ単にそこ等辺に向かって。

「やーい見るからにやられ役ーキングオブザコー」

等と言う挑発をしまくっただけである。それだけで乗る方も乗る方であるが、時々負けたりしてもそれなりに利益が出ていた。昼食も取ったし、さて午後も頑張ろうと、そんな時だ。

瑞穂は不自然な風を感じる。

さっきまで彼女の髪を西に向けて靡かせていた風が急に向きが変わった。瑞穂は風の魔法が使えないのでそういうことは分らないが、丹念に手入れをした瑞穂の黒髪は風向きを調べるに適していた。つまり。

「っと」

と、瑞穂は不自然な風に疑問を抱いて考えてる所で一歩下がる。その直後に風が、瑞穂が居た所を刻んだ。次に。

「氷姫ぃぃぃぃぃッ！」

風と共に、誰かが突進して来るッ！　対する瑞穂は左拳を前に殴って迎え撃つように駆け出し、風に乗ったそいつは刀――いや太刀を振るって瑞穂を迎え撃つも瑞穂は刃が無い箇所を器用に殴って身を低くしてかわし、続いて冷気を込めた右拳で打ち上げるがそいつは蹴りを放って相殺し、直後に納刀して居合いを放ち、瑞穂は氷のハンマーで打ち迎えたッ！

「リフェノ」

「あ？　どーしたよ漆黒の氷姫さん？」

リフェノと呼ばれた女は肩に雑草の様な刀身の太刀を置きながら返す。

彼女の格好は基本緑の民族衣装、その上に緑のジャケットに下には白いズボンを履いている。

「……何で此処に？」
「何でもくそもねーよ。暇潰しに此処に来て見りゃおもしれー奴がいるしよぉ」
とリフェノは首で刀を抑え、指を鳴らして刀を握る。
「迷惑。野獣の剣聖さん」
「減るもんじゃねーだろ。幾らだよ賭け金」
と、二人の会話に比例して周囲の空気はざわついている。
「貴方が相手なら五百」
「よっし、景気いこーぜ。五百万な」
「ふっ、ふざけッ！」
瑞穂は思いっきり不満げに声を荒げる。と言うか流石に景気が良すぎだろう。
ちなみに周囲では。
「さあ張った張った！　漆黒の氷姫ＶＳ野獣の剣聖！　魔導師と剣士の頂上決戦だよ！」
「漆黒の氷姫に四千！」
「野獣の剣聖に六千！」
「氷姫に一万張った！」
「剣聖に三万だ！」
「大穴で引き分け！」
「乗った！　俺も引き分けに七千張るぜ！」
「えー観戦の必須アイテムポップコーンにビール如何っすかーこの熱い日差しの下はビールをくいっと観戦が乙ですぜー」
「ポテチにコークは如何っすかー観戦と言えばポテチにコークが一番！」
「らっしゃいらっしゃい！　焼きそばどうよアンちゃん達！」
「キンキンに冷えたお茶あるよ！　さあ買いな買いな！」
「さて、解説のジョンさん今日の対決如何思いますか？」
「んーそうですね……お二人は知合いのようですが記憶が正しければ対決はこれが初めてではないかと。んー気になりますねー」

と、賭博を仕切る人が現れて誰もが勝敗の行方を賭けたり、飲み物や食べ物を売ったり、実況と解説を勝手に始めたりなどしている。
そんな周囲を無視して。
「そんぐらい稼いでんだろ？　瑞穂」
「稼いでるか！　そっちこそ、持ってるんだろうな五百万！」
などと会話を勝手に展開していく。
「んな金あるわけねいだろ！　叔父さんだってそんな金くれねえよ！」
「じゃあどうするの、お金」
「もーいい、メンドイ後できめるからとっと始めるぞ！」
とリフェノは次の瞬間には太刀を鞘に収めていた。
「それには同意。さっさと始める！」
と瑞穂も拳を構える。誰かが仕切る様に叫ぶ。
「ウィナーマッチスタンバイッ！　ラウゥゥゥーンワンッ！　レディィィ……ッッ！　アァクションッッ！」
二人は同時に駆け出し拳を打ち出して互いの拳をぶつけ合うッ！
弾ける衝撃波ッ！　その勢い、周囲のギャラリーを一気に圧倒するッ！
続いて二人は互い右足から蹴りをぶつけ合うッ！　互いに殴打と蹴りを交わし合い、次に瑞穂は脚を引っ込めメイスを握り締めて腰を捻って突き出すッ！　リフェノはそこに来て腰に吊るした太刀の柄を握り締めて一歩前に強く、大きく踏み込み――ッ！
「疾風駆ッ！」
勢いを付けて居合い抜きを繰り出し、瑞穂の攻撃を先に潰しに掛かるも逆にリフェノが蹴り飛ばされている。何故か？　見れば瑞穂は空手で左膝が突き出ている。メイスは囮で本命は左膝だったッ！
が、飛ばされたリフェノは空中で体勢を整えると太刀を鞘の内に納めたまま太刀をくるくると回してその場で回転して踏み込み、左で持った太刀の柄を右手で握り締め。
「風輪断ッ！」

吼える様に縦に振り下ろす居合い抜きを放ち、縦回転しながら突き進む風刃を放つッ！　瑞穂は今度こそメイスを片手に突き進む風刃を薙ぎ払って突き抜け、リフェノの方も太刀を抜いたまま距離を詰める。

瑞穂は両手でメイスをバットの様に握るとそれで思いっきりリフェノにスイィングッ！　対するリフェノは力強く踏み込んで跳躍しながら高く切り上げ、結果二つの攻撃は同時に重なり相殺ッ！

瑞穂は見上げてリフェノを見上げ、リフェノは見下げて瑞穂を視界に捉えると空中の何かを足場にして刀を突き出して矢の様に突っ込むッ！

瑞穂はワンステップ下がると今度は氷のハンマーを構えて上から振り下ろし着地硬直へと突き刺すッ！

が。その時、瑞穂には思いもよらぬ事が起きた。一瞬。そう、一瞬にしてリフェノが納刀しているのだ。一体いつ？　確かに下降時にはきちんと抜刀状態だった筈。ではこれは何だというのだ。分るのは一つ。

「ぶっとべぇッ！」

ハンマーが振り下ろされるより速く、爆ぜる様な速さで瑞穂に居合い抜きを叩き込むッ！　瑞穂は目を見開き、素早くメイスで防御してそれを受け止めたッ！

瑞穂は高く打ち上げられる。彼女が一瞬にして防御が行えたのは、当然の如く時間停止魔法のおかげだ。瑞穂は宙を舞いながら防御に使ったメイスを見る。

（真っ二つかよ）

「まだおわんねえよッ！」

リフェノは地面を砕く勢いで踏み込むと宙を舞う瑞穂に食い付く。瑞穂は対して空中で体勢を整え音を立てて空中に立ち、メイスの切断面を接着するとリフェノが風に乗って太刀を振り下ろすッ！　瑞穂は上手くメイスに斬撃を当てて受け流し、メイスを放って懐に潜り込んで拳を下から――突然二人の間で風が爆発し、二人は吹っ飛

んだ。
瑞穂とリフェノは互い吹っ飛び、一旦地面に立って膝を折り、バネの様にまた飛び出したッ！　二人は距離を詰めると瑞穂は右の拳を引き、リフェノは太刀を振り上げ、同時に踏み込んで拳と刀が交えるッ！
瑞穂の拳は刀身を擦る様にかわしているのに、刀身が瑞穂の拳を押しこんで進行の邪魔をしているッ！　軋む音を立て、太刀と拳がぶつかり、競合うと言うシュールイズシュールな場面が出来ている。
瑞穂は余った左手を動かす。するといつの間にか彼女が捨てた筈のメイスが握り締められている。メイスの先端に氷塊がくっ付き氷のハンマーと化し、瑞穂はそれを思いっきりリフェノの頭上目掛けてぶんまわすッ！　リフェノは左腰の鞘を左手で引き抜くと振り下ろされるハンマーにぶっ貫くッ！　いや、貫通には至らずに普通にハンマーを抑える程度に収まり、リフェノは一気に蹴り上げる、同時に瑞穂も蹴り上げるッ！
轟音を響かせてて二人は改めて距離を開けてお互いにハンマーと太刀を構えて睨み合い、また踏み出して前に飛び出して武器を振り下ろし合い太刀とハンマーが激突ッ！　交差ッ！　更に振り下ろした武器を握り締め、振り上げて更に交差ッ！　激突ッ！　走る衝撃ッ！
リフェノと瑞穂は更に握り締めた武器を振るう、振るい続け、お互いに武器をぶつけ合うッ！
見る者によっては約数百回、実際は数十回に及ぶであろう攻防が続く、続くッ！　やがて瑞穂は氷に魔力を送るとハンマーの氷塊部分に亀裂が入り――瞬間的にリフェノの蹴りがハンマーに突き刺さるッ！
本来なら、瑞穂は大きく仰け反って大きな隙が出来るのだろう。が、氷塊はあっさりと破片となり、砕けて散り中から支えの棒となるメイスが光を反射しながら登場し、それはそのままリフェノ向けて振り下ろされるッ！　そしてリフェノは突き出した蹴りをそのま

まメイスに向けて身体を捻るッ！
　リフェノは瑞穂のメイスを足で刈り取った直後で背中を見せる形となり、瑞穂はメイスを手放して拳に氷のグローブを付けて無防備と思える背中に拳を叩き付けるがリフェノは上げた脚を地に着けると同時に身を捻って右手で太刀を横に薙ぎ払い、瑞穂は再び拳を交差させて刃の無い部分を滑らせ、更に足元も凍結させて足を滑らせて低姿勢に移ると横に薙ぎ払われる太刀が肉体に直撃することを回避し、瑞穂はリフェノの胸の中央へ拳を叩き込むッ！
　が、リフェノは神業染みた剣捌きで瑞穂の攻撃を受け止めるッ！
　何が起きたのか、と言われれば事は簡単。リフェノは握った太刀を素早く逆手に持ち替え、太刀を自分の胸の前に持って来ただけである。しかし、あまりの速度に奇跡とも呼べる現象だ。
　二人を中心に爆ぜる衝撃。瑞穂はバックステップで下がり、リフェノは持ち方を戻して距離を詰めるも突き出されるメイスに阻まれたッ！
　リフェノは太刀を振るって弾き、返す刃で瑞穂に斬りかかるも続いて瑞穂は弾かれたメイスをぐるんぐるんと大きく回して手元に戻して距離を詰めるリフェノに再び突き出すッ！
　火花散らし響く激突音。両者はまた弾かれ更に攻撃を加え、弾き、交差、激突、激突、叩く、激突、斬る激突叩き込む激突振るう激突攻撃激突攻撃激突激突激突激突激突太刀とメイスとが激しく火花を散らしぶつかりあい、どちらも譲らずに武器を交え続けるッ！
　何も知らぬ人が聞けば何かの工事か機関銃の一斉掃射にも聞こえる様な激しい武器攻撃の押収である。瑞穂がメイスを振るい、リフェノが太刀で応え刃を返し、瑞穂がそれをメイスで叩き落とす。これを繰り返し、周囲をも見入る様な攻撃の押収を続ける。
　やがてリフェノは蹴りを繰り出すことで距離を空ける。
「チッ、埒があかねえ。しゃーない。行くぞ草薙、術式起動ッ！」
　――来たよ、また蛇っぽいの！
　リフェノは太刀に何らかの術式を付与し、瑞穂の中で精霊が注意

を促す。精霊ミズホからはリフェノの握る太刀から多数の――正確には八本の――蛇の幻影が巻き付いてるように見える。瑞穂的には妙なオーラを纏っただけの剣にしか見えないが。
それは、霊をも喰い尽す精神を食らう牙。物質で無いなら、例え神でさえ喰らい尽さんとする邪神剣。
「――行くぞ」
リフェノは改めて太刀を両手で握り締めて一気に距離を詰める。瑞穂はメイスで殴りかかるが。
――まともに交戦しちゃ駄目だよっ。
と精霊が喧しく警告をするが、瑞穂は全力で無視してメイスで思いっきり叩きつける。遠心力を利用した全力の打撃。
迎えるリフェノはぶん回されたメイスを殴り返して瑞穂に無理矢理攻撃を叩き込むッ！　瑞穂は弾かれたメイスを消して防御の為にもう一度召喚し、攻撃を凌ぐッ！
瞬間、妙に瑞穂は気力が低下する現実に直面する。と混乱しているとリフェノがもう一度攻撃を叩き込み、瑞穂の防御が強引に崩されるッ！
「わっ」
「喰らい付けぇッ！」
更にリフェノは太刀を大振りで更に攻撃を加えて行く。斬り付け薙ぎ払い斬り返して撃ち込んでたたっ斬りぶった斬り獣が食らい付く様に獲物に噛み付く様に何度も何度も瑞穂の身体に怒涛の斬撃を打込む、打込む、打込む打込む打込む打込む打込む打込む打込む打込む打込む打込む打込む打込む打込む打込む打込む打込む打込むッ！
「捉えたぁッ！」
リフェノはやがて太刀を掲げ始める。するとどうだろうか、瑞穂の身体から蒼いオーラが太刀に吸われ、食われて行くではないか。
そして太刀が纏うオーラは一気に膨らみ。
「もってっけぇぇぇッ！」

それ（溜め込んだ魔力）をそっくりそのまま瑞穂へと叩き込んだッ！　受けた瑞穂は思い切りぶっとばされ、地面を転がって倒れ込み動かなくなる。
リフェノはまだ体に残る魔力を投げ捨てる。それは塵となって宙に消え、まるで翼の様であった。
「じゃ、あたしの勝ちってことで良いか？」
「待てよ」
瑞穂は言いながら立ち上がる。よろよろとだが、その瞳には強い意思が宿っている。
「あ？」
「マッチ制。三ラウンド方式、終りを決めるなら後もう一回勝ってからにしなよ」
「負ける度に増やす気かよ、お前」
「負ける度に増やして勝てたらね」
瑞穂は深呼吸を行うと指を鳴らして拳を構え直す。
「まあいっか。おい審判！」
「ラウゥゥゥゥゥンットゥゥゥッ！　レディアァクションッ！」
瑞穂は掛け声と同時に駆け出し――取り出したメイスで地面を叩く。
「は？」
「踊れ、雪塵と」
リフェノの足元から突き出る氷。リフェノは素早く後ろに跳ぶが。
「逃がすかッ！」
雪の欠片が風に乗って舞い、リフェノに纏わり付く。
「しゃらくせえよッ！」
風を纏った剣でそれらを払うが、直後に氷の針が無数に彼女へと飛び交っていく。
返す刃で飛び込んでくるそれを薙ぎ払って行き、リフェノはあらゆる魔法攻撃を超えていく。
だが瑞穂の目的はそんな所には無い。彼女の真の目的、それは。

「随分、冷えたよね」
この場の、空気を冷気で満たす事。
瑞穂はメイスを構え、更に魔力を練っていく。
「させるか！」
本能的にリフェノは危険を感じ取り瑞穂に向かって駆ける。だがな、その行為は既に遅い。
空気が渦を巻き、空気中の水分を凍らせたとは思えぬほどの質、量の氷塊が舞い上がっていく。当然この程度のものなら切り落とせば良いのだ、リフェノは向かって来る氷を切裂く。当然、飛んでくる魔力物質を切り落とすと言うのは、霊食い（スピリット・イート）による魔力食いの発動条件を満たしている。つまり、こんなことをしても相手の魔力を回復させるだけだ。
しかし氷塊の数、軌道は徐々に変化していく。空から飛来、前から飛翔、後ろから渦巻く風に流されて来る物など様々だ。リフェノの握っている草薙と言う剣は非常に重い。太刀として平均的な長さな割りに重さが二十四キロと言う酷過ぎるレベルだ。流石に全部対応してたら二ラウンド目と言う事もあり体力が持たない。
（まだ大丈夫だが……続けるのはやばい）
魔力は体力を消費して生み出すが、逆の変換は当然無理だ。リフェノは旋風を纏って氷を貫いて瑞穂本人へと突撃していく。
あらゆる魔法を叩いて突っ切る魔導師殺しの言われ名は伊達ではないのだ。
瑞穂それに対応してメイスをハンマーに変化させ、それを思いっきり叩きつけ、風と氷が再び激突するッ！
が、リフェノの感覚は風とリンクしている。だから分る。
「後ろかッ！」
背中に殺到する無数の氷針。リフェノは競り合いを止めて素早くバックステップを行う。が、剣がハンマーの氷に張り付いて取れない。リフェノは一旦力を入れなおして剣を毟り取り、飛翔する氷の針を薙ぎ払って距離取る。軽く瑞穂の蹴りが飛んで来るが、何とか

掠る程度に抑え、距離を取り、場所を変えて自分に有利な状況を作る。
リフェノの生存本能が叫ぶ。瑞穂の周囲は危険区域だと。ならばと彼女はその本能に従う。リフェノが剣聖たり得ている多くの理由がこの本能のおかげだ。生き抜きたいと言う本能を過剰に動かすことにより多くの戦いで勝機を見出してきた一種の相棒だ。
しかし、この戦闘区域は既に漆黒の氷姫である瑞穂の手の内。もはや生存本能などではどうしようもない段階まで来ている。本気で生き延びるなら、もはや降参以外に手立ては無い。
回りこむリフェノに氷の拳が群れを成して襲い来る。更に後ろから氷のブロックが降り注いでくる。一見逃げ場など何処にも無い様に見える。だが、無いなら作れば良いのだ。
リフェノは行く手を塞ぐブロックを斬って魔力として吸収していく。次々に逃げ場を作って一先ず距離を開けるが瑞穂にとってそんなもの関係ない。魔法に距離など関係なく氷で追い立てていく。
「凍れ」
瑞穂はメイスをかざし、リフェノの移動先に向けて光線を放つ。
リフェノは余計しつこく殺到する氷の塊に対処しようとした瞬間、その光線に気付く。
（やっべッ！）
リフェノは冷や汗を流す。理由は一つ、発動者と繋がった状態の魔法は吸収出来ないからだ。飛び交う氷なら斬れば吸収出来るが、直接手から放たれるものはどうしようもない。更に飛び交う氷は微妙に遅い。対応するにはまだ遠く、避ければほぼ直撃するだろう。何て、いやらしい。
（術式の起動、出来るか！？）
――無理ですマスター、時間がかかって直撃しますッ！
リフェノの脳に声が響く。主は彼女が握っている邪神剣。リフェノは舌を打ち、飛び交う氷塊突っ込み、薙ぎ払う。振り返った直後、身体に数発の氷の拳がリフェノの身体を打つ。

腹に打ち込まれ、体中の息が押し出されそうな苦しみを歯を食いしばって耐え凌ぎ、更に飛んで来る氷を薙ぎ払っていく

「第二波、いけ」

更に瑞穂の元から多くのアイスビームが飛び交う。リフェノは同時に展開される氷塊を草薙で薙ぎ払いつつ瑞穂へと距離を縮めていく。

さっきは開けた距離を再び詰めるのは、無理にでも攻撃に転じた方が良いと判断したためだ。

瑞穂も先程と違い、戦法を魔法中心に変えている。だがリフェノに戦法を素早く変更すると言う手段は少ない。無策でも突っ込むくらいしかないのだ。今は。

リフェノは一秒以下の速度で納刀を行い、飛び込む氷を払い、避け、時々敢えて受け、瑞穂に肉薄し。

途端、瑞穂はリフェノの眼前にメイスを突き付け、光線が放たれリフェノは風を纏った居合い抜きを放ち、それを弾くッ！

弾ける衝撃波、リフェノは風を纏わせた剣を光線に押し込み、直撃を避ける。光線は収まり、リフェノは身を捻りながら納刀して再び踏み込んで居合いを解き放つッ！

しかし、瑞穂は既にバックステッポゥで距離を開けて。

「逃すかぁぁぁッ！」

リフェノは放った居合いと同時に風を操り、瑞穂を引き寄せる。尤も、足元凍らせてるので意味は無いのだが。

「ふん！」

瑞穂は両手に巨大な氷の拳生み出し、吹雪に乗せて打ち出す。対してリフェノは太刀を振るって攻撃を防……と、気が付けば吹雪が更に強みを増している。

（太刀を振り上げるほどの気力が……でない！？）

リフェノはやむなく太刀を両手で握り締め、防御の体勢を取るが迫り来る吹雪に乗った拳を防ぎ切れるほどではなく、防御が押し潰される。

瑞穂は追い討ちをかける様に氷の剣を大量に生産し。
「いけ」
それらを操り、リフェノの体中に無数の氷剣を刺す。体中が冷え切った彼女に飛び交う数多の氷剣に対処する術など無い。
「く、っそ……」
それでもまだ立つ。歯を食いしばり、地を踏み付ける。下がった目線を上げ――そこに瑞穂が居た。
彼女は右手を後ろに置き、手を開いてる。すると瑞穂の手は氷に包まれていき、巨大な氷の手となる。
「これで終わらせる」
その手でリフェノを鷲掴みにし、氷の中に捕らえ、リフェノの首を掴み持ち上げる。
「氷結と」
そして、瑞穂の周囲から吹雪が、氷柱が、氷剣やらが舞い、リフェノに襲い掛かるッ！　荒れ狂う氷の嵐、雪と氷が天に昇り、氷の鎖が地に下りリフェノの身体を蹂躙しつくすッ！
そして瑞穂の手先は徐々に氷の塊となっていく。情けも容赦も遠慮も何も無く、氷は無情にリフェノの身体から体温だけを奪い去っていき、代わりの巨大な氷の像となる。
リフェノは薄れていく意識の中、もう寒さを感じなくなった頃、最後に瑞穂を見る。冷たい視線で自分を見る彼女を。
「砕け散れッ！」
瑞穂は振り向き、後ろに方に向けて腕を振るい、同時に氷塊も砕け散る。
リフェノは無情にも音も無く氷雪のカーペットに沈み、瑞穂は更に身体を一周回して身体に纏った冷気を外に打ち出す。それは、まるで翼を広げるかの様に空気中に消えていった。
「立ちなよ。後もう一つ」
瑞穂に言われる様にリフェノはゆっくりと立ち上がる。瑞穂はそれを腕を組み、冷やかに見つめている。

「……んじゃ、ま。恥も外聞も大人げも無く、さ」
リフェノは納刀し、背負った長刀の柄に右手をかける。
「全力で、行くぞおらぁッ！」
「じゃ、こっちも……」
瑞穂は心の奥底でだらだらしているもう一つの自分をたたき起こす。
――行き成りなんなのー。
（起きて。一気にけり付けるから）
――分った。じゃあ、重ねよう。
瑞穂は集中する。時間は一秒、それだけあれば瑞穂はもう一人の自分と同調（シンクロ）できる。黒い髪は凍り付いた様に蒼く染まり、瞳は黒から蒼白く侵食されていく。
リフェノは一層深く顔のしわを刻み、瑞穂を睨む。そして、二人は同時に叫んだ。
「審判ッッ！！」
「は、はいッ！　ラウンットゥリィィィレディアクションッッ！！」
同時に二人は動く。瑞穂は時間を凍らせ、リフェノに向かって走り出す。
が、凍った時間でもリフェノは無理やり身体を動かす。それだけでも驚嘆に値する光景だ。リフェノはこの魔法が時間と空間、つまり世界の一部を切り取って凍らせていると感覚的に理解している。ようは、冷気から凍結なのだ。
ならば、熱気。熱で動かせば、世界は動く。凍った時間は解けて僅かでも動き始める。
だが、瑞穂にはんな事関係ない――動くよりも、前にぶっ潰す。何て簡単な理論にして答え。
「潰れろッ！」
瑞穂はメイスの先端に氷の鎖を繋げ、それをリフェノへと振り回す。
氷鎖による鞭攻撃か、いや違う。瑞穂は鈍器好きだ、鞭などと言

う武器は好みはしない。知っているだろうか？　世の中には、鎖付きの鉄球をハンマーと呼ぶということを。
そう、伸びる氷の鎖。その先に取り付けるは刺だらけの氷塊ッ！
ぶん回される氷解、いや氷球は遠心力を身に付け、そのままリフェノの元に叩きつけられる――。
だが、それはない。ないったら、無いのだ。
リフェノが抜き放ち、使うのがただの刀なら、このまま砕かれるだけだったろう。しかし、この長刀は違う。これは異世界の住民より渡された、六十四代目正宗。全長にして一・四三mと言う点以外に特徴は無いが、リフェノにとって大きな特徴を持つ。
それは、まるでその存在自体が、リフェノの為だけに作られたかのようだと言う事。その刀の柄は握っている感覚さえ失うくらい、リフェノの手に合い、そして扱い易かった。故にこの刀を握った時の彼女は、通常の数倍も剣術レベルが上昇している。
左手で柄の先を握り、リフェノは背中からそれを抜刀し、同時に斬撃を放つ。奇しくも居合いの要領で抜刀され放たれる一撃は凍った世界ごと迫る氷球を一刀両断する。
「あいっ変わらず訳分らん切味ッ！」
リフェノは完全に戻った己の自由を噛み締めつつ返す刃で瑞穂に斬撃を送り込む。
振られた刃は無数の宙を舞う刃となり瑞穂へと迫り来る。それら全てが事象その物を切り裂く刃。リフェノが魔導師殺しと呼ばれるもう一つの由来。魔法その物さえ切断し、無効化する斬撃だ。
瑞穂はそれらを飛び越し、空間を凍らせて虚空を跳躍し、リフェノの下へ飛び込む。対してリフェノは正宗を構え直して上に向けて大振りに斬る。
瑞穂は空間凍結で強引に方向性を変更し、瑞穂を食らわんと飛び交う斬線をかわしてリフェノに迫る。
幾らリフェノの剣術レベルが規格外になっていようとも、幾ら重さに慣れていようとも、長いリーチの生み出す近接戦闘のやり難さ

には変わらない、筈。
無論、筈だった。
リフェノは正宗の持ち方を両手から片手に変え、左手を正宗の補佐をする様に構えるとそのまま瑞穂に振って来る。
距離は一mを通り過ぎての出来事。あろうことかこの女、刀身一mはあるこの刀を片手で、近接戦を仕掛けて来た。これには流石瑞穂も驚愕し。
「チートだッ！」
等と叫んでいる。しかし、格闘戦を中心に行う瑞穂らしくリフェノが放つ斬撃全てをかわし続ける。しかしリフェノもリフェノで風を操り、真空空間を駆使して正宗の振りをコンパクトにし、長刀である事を忘れさせるほど機敏に斬撃を放ち続ける。
瑞穂は距離を五十以下まで詰め、パンチとキックによる近接戦闘を繰り広げている。一見瑞穂がよりコンパクトかつリーチの差を埋めているようにも見えるが、肝心のリフェノが神業みたいな刀捌きで直ぐに拳と蹴りに対応する為、全く攻撃が通らない。
瑞穂が次々に攻撃を繰り出し、正宗が引き戻されてはそれを捌く為に攻撃の軌道を変えて行く。
拳を打ち出し、振られた長刀を落とす。蹴りを放ち、迫る長刀を叩く。
拳を突き出し、蘇る長刀を払う。蹴りを出し、戻る長刀を弾く。
ずっと同じことの繰り返し。断続的に金属が打たれる音が響く。
一見地味ではあるが、非常に高度な戦いだ。何せ、本来ならどう考えても対応できない距離に対応出来ない武器で挑み、悉く対応し続けている。
もうチートと言うよりバグだ。しかも掠っても一撃で意識を刈り取るほどの切味を持つ刀。その刃だけを避けて打つのは中々に精神を使う。少しでも向こうが方向をずらせばそこで終りなのだから。
が、氷結瑞穂はその程度で終わる様な女では、無い。目には目を、チートにはチートを、バグで挑むのなら、バグで対応を。

――準備完了っ。
（とっととやれッ！）
瞬間。世界は再び絶対零度に包まれる。
「チッ！」
さっきの世界停止魔法ならまだやれた。何せ空間そのものに術がかけられていたのだ、切込みさえ入れれば綻んで崩れるような脆い術。
だが今度は違う。ただ一定空間に魔力を持って冷気を導いただけだ。リフェノは長刀を振るうスピードを一切緩めずに熱風を纏い、熱を保って漆黒の氷姫へと長刀を奔らせるッ！
瑞穂は変らずに刃の無い部分から起動をずらす様に拳を叩きつける。火花は散り、長刀の軌道はがくんと上に跳ね上がる。
展開される極寒の空間。当然起きる物と言えば――氷雪の舞踏。もはや風は吹き、もはや刃と化した無数の雪は風に乗って吹雪と化してリフェノに纏う。
幾ら熱風で体温を守っても、その程度で吹雪を抑える事など出来る筈も無くリフェノの身体を雪塵が舞い切り刻む。
「チィッ！」
リフェノは瑞穂への攻撃が捌かれると同時に身を捻って後ろの吹雪を両断し、そのまま再び瑞穂の蹴りを捌くッ！
「速いよッ！」
「るせぇよッ！」
瑞穂は素早く蹴りから拳の攻撃に変更し――雪崩を纏って殴り掛かる。
「てめふざけッ！」
リフェノは長刀を大振りに――それでもほぼ一瞬――切り上げ、無数の斬撃で雪崩を払う。がそこに瑞穂は居ない。
が、リフェノは素早く後ろに向くとそこには冷気を纏う拳を構える瑞穂が突っ込んで。
「させるかッ！」

リフェノは素早く身を反転させ同時に長刀の攻撃を行い、瑞穂は刀身を殴ることで刀身を凍らせて一瞬だけでも刀の動きを封じ拳を叩き込むッ！

リフェノは直に刀の凍結を切って戻し神業が如く剣捌きで手元に戻し、迫る瑞穂の拳を切り落とさんと振るうッ！

瑞穂はもう少しで肉体を打てる状況を迫る長刀を弾く方向に変えて弾き、更に瑞穂は格闘を行いながらも上級氷魔法を展開する。

リフェノと瑞穂が睨み合った瞬間、リフェノへ雪球が周囲から襲って来る。リフェノは舌を打ち瑞穂から距離を離す。

リフェノは追って来ると思いきや、瑞穂は留まっていたが気にせずにリフェノは正宗を二度三度古い、周囲の雪玉を一気に切り払う。そこに追い討ちをかける様に瑞穂の魔法が飛び交う。リフェノを囲むように生み出される氷塊、その身体を貫かんと突き出る氷杭、飛来する氷結の棺、暴風の様に飛び出る氷の槍、おまけと言わんばかりにばら撒かれる氷の光線。

それら全てがリフェノの持つ長刀の一閃にて脆くも薙ぎ払われる。しかし、瑞穂が距離を詰めなかった理由が此処にある。

リフェノの魔法切りは魔力食いとは違い、切裂いた程度で魔法の効力が消失する訳ではない。威力を失うだけであり、切裂かれた魔法の残骸が暫くそこに停滞する。上級魔法ともなれば、デリケートな物等はそれで効力を失う。

が、瑞穂が展開したものはそう言う類のものではなく、宙に暫く停滞するものだ。当然、それらを邪魔に感じたリフェノは更に長刀を大きく振るい風を巻き起こしてそれらを薙ぎ払う。

だが、瑞穂にとってそれさえも十分な時間だ。そう。

「理不尽と、世界は停止せよッ！」

時間停止し。

「術式、起動ッ！」

瑞穂は自身の手の内に魔法を展開する。魔法陣が次々に展開され収束して行き、極大の冷気が瑞穂の右手に集う。

『汝、我らが秘めし負を受けよ！　刻め、極凍の波動ッ！』
呪文の詠唱、それこの世界における制御装置。魔法陣と言う大きなシステム基礎に呪文を刻むことにより、より精密な効力を発揮する命令文。
瑞穂の手に収束された術式が活発に動きうねり、寒々しい光を放ち始め。
『アブソリュートゼロ・オバードライヴッ！』
瑞穂はリフェノに向け、絶凍の光を放つソレを叩き込む――だが、忘れてはいけない。この世界は凍結により時間と空間が止まった世界だ。つまり、熱さえあれば動き出す。
「お……お、お、お、おおおおおおおおおッ！」
リフェノは徐々に、そして確実に動きを取り戻す。
何故出来るのか？　簡単だ、元々熱風を纏っていたのだ。最初は自分に影響が出ない様に調整していたが、向こうがその気なら遠慮も無く世界を再び動かしていくほどの風を呼び込もうッ！
リフェノは声を上げる。体中が痛みで動きが鈍ってることを訴える。
（知るかよッ！）
咆哮を上げたまま、獣の本性を剥き出しにして納刀し、背負っていた長い刀を草薙と同じ所に持って行き、同じ様に引き抜こうと構える。
瑞穂は既に一ｍを切った位置に居る。つまり、至近距離で正宗の居合い切りを決めようと言うのだ、彼女は。確かに決まれば、世界さえ両断しかねぬほどの一撃が出るだろう。出れば、だが。長い刀身を先に抜いて瑞穂を切裂くか、抜けずに瑞穂の手による氷付けとなるか。
「再度世界停止ッ！」
――時間をー直に発動出来る魔法じゃないー。
（役に立たないなッ！）
――あんなとんでも魔法がほいほい使えると思わないでよー。

リフェノは踏み込むと同時に刀身を引き抜き始める。瑞穂は出来うる限りの全力で、出来うる限りの全速でリフェノに肉薄する。リフェノは風を纏い、握った刀に集中させる。
「――迷いは捨てる。恐れも要らない、ただこの一撃に――！」
リフェノはより強く、力強く踏み込み、身体を前に突き出し、一気に引く抜く――直前、瑞穂の極凍の波動がリフェノの身体を貫いた。
弾ける光、体中から抜けていく体温。リフェノは歯を食いしばり、目を見開き、それでも。
「それでも、前へ――！」
身を低く、兎に角前へ。身体凍り付いてる、それがどうした。まだ動ける、なら足掻く。それが何時もの彼女なのだから。
強烈な風を纏い、断続的に、同時間に何度も風による加速、真空空間を利用した超加速魔法。風属性魔法最上級最上段、神風。ソレをリフェノが居合いに織り交ぜた。名を。
「神・風・閃ッッ！！」
氷の中に閉じていく意識の中、リフェノは神速に近い速度で居合いを放つ。
同時、瑞穂はリフェノに掌低を埋め込み、氷光の爆発を見た瞬間、意識がぷつりと切れた。

「とまあ、こんな感じ」
瑞穂はホテルであっけらかんと語り終える。
対峙するティンはポカーンとしており、浅美はぐーぐー寝て。
「ふひひ……お魚さんそんなに要らないよ……」
ぐーぐー寝てた。寝てるったら寝てる。
「聞きたいことは」
「いや続きを語ろうよ」
「目が覚めたら誰も居なかった。以上」

「あれ、重要な所が抜けてる！？」
ちゃんちゃん。
「終わりなの！？」

猫と狼の対決（後書き）

解説コーナー。

六十四代目「正宗」

正宗と言う一族が打った六十四本目の正宗。正宗の一族とは正宗の血縁ではなくその刀鍛冶としての技術の全てを受け継ぎし者が名を受け継ぐ者であり、実際に血縁関係は無い。

ちなみにこの六十四代目と言う呼び方も非公式であり、本来は何と呼ぶかは不明。なかごにも「正宗・六拾四製」とだけ刻まれており、分るのは「正宗と言う一族の一人が打った六十四番目の刀」と言うくらいである。

時間停止魔法

瑞穂が友人から「氷魔法の真髄とは、停止にある」と言う理論から生み出された魔法。空間と時間的概念に干渉し、一定空間を完全停止する。

この中で動けるのは自身の存在を零秒で干渉し動ける者か、零秒で行動が出来る者に限る。

前者は氷魔導師をそのまま指すが、後者はほぼ人間を超えていると言っても良い。

同調（シンクロ）

氷精霊ミズホは元々瑞穂の作った第二人格であり、瑞穂の魔力そのもの。

本来は単なる第二人格として何時かは第一人格と統合する結末が

あったのだろうが、魔力が原因として生まれたことに状況が一変。凍結による時間延長によりミズホの人格期間が一秒ごとに長くなり、僅か一年で現実の一秒が十万年になるほどにまで延長される。結果、永い間魔力に浸り続けた人格はやがて精霊へと昇華するに至った。

つまり、氷精霊ミズホとは瑞穂と同一存在であり、魂レベルで瑞穂と同一の存在である。そんな彼女だからこそ裏技、それが同調。

心と魂を一つにすること瑞穂の身体で強い部分を倍加に近いほど増加させ、魔法の発動を準備しながら行動出来ると言う規格外な動きを見せる。

以上。今回は書くのやたら延びた。

まいっか。じゃ、次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2909w/

好きにしろ（仮）シリーズ：神剣の舞手外伝

2011年10月9日15時51分発行